文明動態学

論文

Dyn. Civ., 2022
Vol. 1, pp. 21-38
Doi 10.18926/63025
© 2022 by RIDC

古墳文化とマヤ文明

―比較考古学研究事始―

青山和夫・松木武彦

Kofun culture and the ancient Maya: An introductory comparative archaeology of "Out of Eurasia"

AOYAMA Kazuo * and MATSUGI Takehiko **

* Ibaraki University, College of Humanities and Social Sciences, Mito, Ibaraki prefecture, 310-8512, Japan

** The National Museum of Japanese History, School of Cultural and Social Studies, The Graduate University for Advanced Studies, Sakura, Chiba prefecture, 285-8502, Japan

Abstract Both the ancient Maya and Kofun society of Japan were cultural regions formed by *Homo sapiens* groups after leaving the Eurasian continent more than 10,000 years ago. In this paper, we examine their similarities and differences by comparing perspectives on time and space. The two societies were stratified and witnessed the development of monuments that emphasized their verticality. The greatest similarity was the formation of a network society in which local polities coexisted without the institutionalization of centralized leadership at the beginning. Subsequently, the Kofun society adopted the worldview of the Eurasian continent including the concept of the "nation", thereby achieving a new social integration. On the other hand, the ancient Maya, a primary civilization, did not go through the same social process and maintained a sustainable society over a long period of time, maintaining the same form of worldview, monuments, and technological systems. On the similarities rooted in the universality of the human body and cognition, disparity in the process of environmental and social changes, including the direction and distance of "Out of Eurasia", can be seen in the subsequent differences between the ancient Maya and the Japanese archipelago. In this paper, we have illustrated how the similarities and differences created diverse directions of culture and history.

Keywords Ancient Maya, Kofun, monuments, comparative archaeology

はじめに

本論は、日本列島の古墳文化と中米のマヤ文明の比較考古学研究に関する試論である。マヤ文明は、ユカタン半島を中心にメソアメリカ南東部で前 1000 年頃から 16 世紀前葉にスペイン人が侵略するまで 2500 年ほど盛衰した。いっぽう古墳文化[1)]は、紀元前 1000 年を過ぎた頃から始まる農耕社会の複合化の一つの帰結として紀元後３世紀から７世紀まで続いた政治社会（初期国家）の物質的反映で、８世紀初頭に成熟国家が成立するまでの 500 年ほど存続した。

両地域は、地球上で大きく離れた場所にあるが、アフリカを発したホモ・サピエンスがユーラシアに至り、さらにそこから先へと進出して文明を築いたところという点では、人類史上相似の時空にある。継続時間の長さは異なるが、両者の盛期は同時代にあり、巨大な建造物を残した複合社会である。両者が約 2,500 年（マヤ）と約 500 年（古墳）という著しい時間幅の差をもつことによって比較検討をためらうのではなく、その差の中にこそ両者の本質に深

く関わる要因を見出し、逆にその差を歴史的に意味づけていこうというのが本論の視座である。

マヤ文明をはじめとするメソアメリカは、南米のアンデス文明、メソポタミア文明や古代中国文明とともに、もともといかなる文明もないところから独自に生まれた世界四大一次文明の一角をなす（青山ほか 2019）。マヤ人は、ユーラシアの諸社会と交流することなく、先スペイン期（16 世紀以前）に都市・文字文明を独自に築きあげた。対照的に東アジア墳墓文化（松木 2019a）と総称される日本列島の古墳と朝鮮半島の墳墓は、漢が衰退した 2 世紀から 6 世紀にかけてユーラシアの東端に展開した二次文明と位置付けられる。一次（マヤ）と二次（古墳）と仮称した地球上での空間的立地の違いも、先の時間幅の差と連関させつつ両者の歴史的本質を考究するための基軸とする。

さらに本論では、両地域の比較を単なる事象の並列的提示に終わらせないために、マヤと古墳に共通して顕著な特徴である大型建造物、すなわちモニュメントを軸に、他のさまざまな文化要素（生産・流通、都市、戦争など）のつながりかたと、その変化のプロセスを比較する。モニュメントとは、一般に「物理的な機能が明確でない建造物」（松木 2020a:1）であり、人間行動に根ざした本質として「人の心を動かす働きを持つもの」のうち、「建造物や大きな彫刻のように、ある程度規模の大きなもの」をとくにそう呼ぶ（松本 2020:215）。　文明化とは、ヒトが生態的側面と認知的側面の双方において周囲を人工的な環境を形成していく動きであるが、とくに認知的側面において人工的環境形成の核や画期になるのがモニュメントであると価値づけられ（松本 ibid:219-220）、これを一つの共通した視準としてマヤと古墳の両者を比較分析していくことは有効であろう。このような意図から、本論では、神殿、墓、防御施設といった旧来の類別を強調せず、それらがもつ「人の心を動かす側面」を普遍的・通時的に抽出することによって、モニュメントを軸とした新たな体系的分析を目ざしている。

以上に述べてきた方針のもとに、本論では、それぞれの研究で保持されてきた資料への視座・認識・分析の差異を超え、「同じ目」でプロセスを観察することによって、伝統的バイアスを極力除去した新たな解釈の可能性を示す。古墳文化とマヤ文明の比較研究によって、文明とは何か、文明はなぜ、どのように興り変化したのかについて、ユーラシアや西洋文明と接触後の社会の研究では得られない新たな文明史観や視点を提供して「真の世界史」・「真の文明史」の構築に貢献できる。

1．マヤと日本列島

(1) 両地域の概観－石器の都市・文字文明と、都市なき金属器社会・限定的な文字文化－

まず、マヤと日本列島という両地域の歴史的文脈を見通し、モニュメントを軸とした比較作業の土台を整えておく。以下、環境、空間構造、モニュメント、技術と都市、文字と暦、多神教といった点にとくに留意しつつ、両地域の特質を比較検討する。

① 環境　マヤ文明は現在のメキシコ南東部、ベリーズ、グアテマラ、ホンジュラス西部にかけて展開した。その面積は約 38 万㎢であり、日本列島の面積とほぼ同じである。マヤ地域は太平洋、メキシコ湾とカリブ海に面して、熱帯・亜熱帯地域に属する。季節は乾期（夏）と雨期（冬）に分けられる。その自然環境は極めて多様（熱帯雨林、熱帯サバンナやステップの低地及び針葉樹林の高地）であり、エジプトのナイル川流域のような「乾燥地帯の大河流域の平地」という単調さとは対照的である。多様な自然環境に刺激されて原材料、特産作物、製品などの地域間・地域内交換が活発に行われた。マヤ人は物資だけでなく、知識も盛んに交換してマヤ文明を築き上げていった（青山 2015）。

いっぽう、古墳文化の主舞台となったのは、日本列島のうちでも、九州・四国・本州とその縁辺の島々からなる「中央部」とよばれる地域である。温帯性の温暖湿潤気候で、降水量のピークなどに地域差はあるが、マヤのように広大な高地はなく居住域の高度はほぼ一様で、植生は常緑広葉樹林と落葉広葉樹林に限られ、マヤほどは多様でない。そのため、地域間や地域内の奢侈品や特産品の交換は活発であったが、基幹作物や原材料の地域間交換に再生産を頼るほどの地域間分業には至らなかった。

ただし、古墳文化は、その最終局面に当たる 6 世紀中頃までは、生産のための基幹物資である金属素材（青銅・鉄）を生産できず、中国や朝鮮半島からの輸入に依拠せざるをえないという特異な経済構造をもった。物資や知識の地域内交換が文化領域を作り上げた点はマヤと同様であるが、その供給元が外部からの輸入経路という明確な一元性をもっていた点は異質であり、後で検討する両地域の歴史的なプロセスの違いにつながった可能性が高い。

② 空間構造　古典期マヤ文明は、政治的に統一されな

い諸王朝のネットワーク型の文明であった。マヤ文明では、複数の中核的な都市が盛衰した。最大級の神殿ピラミッドは有力な王朝の大都市に集中するが、神殿ピラミッドは遠隔の中小都市にも分布した。マヤ文明は変化し続けた動態的な文明であり、複数の広域王国が形成された時期と小王国が林立した時期が繰り返された。これは統一王朝＝文明という見方への反証といえよう（青山 2015:110）。メソポタミア文明や古代エジプト文明とは異なり、マヤは半乾燥地域の大河流域で大規模な灌漑治水事業を発達させず、主に中小河川、湖沼や湧水などを利用した灌漑農業、段々畑、家庭菜園などの集約農業と焼畑農業を組み合わせて多様な農業を展開した非大河灌漑文明であった。トウモロコシ農耕を生業の基盤にしたマヤ文明では、大河川は文明発祥の必要条件ではなかったのである。

古墳文化は、「大王（倭王）」を核として政治的に統合された首長連合と考えられてきた。しかし、後述のように、モニュメントの規模・分布・内容のあり方からみて、その連合は緩く、有力な中央の政体群（諸王朝）を核に、自立した地方の政体群（諸王朝）がルースに結び合ったネットワーク型社会を想定するほうが、さまざまな事象を無理なく理解できる。マヤと同様、大河と灌漑治水事業によって立つ広域支配ではなく、中小の河川を利用した集約的な灌漑稲作に畑作を組み合わせた混合農業を基盤としていた。ただ、モニュメントの立地からみて、王の権威の経済的基盤として交易も大きな比重を占めていた可能性が高い。

③ モニュメント　マヤの神殿はピラミッド状基壇の上に配置され、神殿ピラミッドを構成した（青山 2013）。方形基調が圧倒的に多く、円形基調は極めて稀有である。複数の神殿ピラミッドや王宮を頂く大きな丘のような建築複合体をなす場合があり、ギリシア考古学の借用で「アクロポリス」と呼ぶ。ただし古代ギリシアのパルテノン神殿がアクロポリスという自然の丘の上に建造されたのとは対照的に、マヤ文明のアクロポリスの多くは同じ場所に公共建築を増改築した「人工の丘」である[2]。ユーラシアの他地域の大型墳丘墓の多数派が墓室の上に塚をかぶせる「封土墓」であるのに対し、古墳は、先に塚を築いてその上に墓室を設ける「墳丘墓」である点で大きく異なる[3]。むしろ、高い基壇の上に主を神格化する葬送儀礼の場を配置するという構造において、古墳はマヤの神殿ピラミッドに近い。古墳も多数が集まって複合体をなすが、神殿ピラミッド群をつなぐ舗装道路、公共広場、球技場、王宮からなる神聖なランドスケープを形成しなかった点はマヤと異なる。

④ 技術と都市　マヤ文明の都市では、石器を主要利器とする新石器段階の技術と人力エネルギーによって高さが 72m に達する巨大な石造神殿ピラミッドが林立した。マヤ文明は、世界の他の文明と同様に農耕を生業の基盤としながらも、古墳時代中期にウマが導入された日本列島とは異なり、鉄器、荷車、人や重い物を運ぶ大型の家畜がなかった。マヤ人は、16 世紀まで石器を主要利器として使い続けた。金や銅製品など大部分の金属製品は装飾品や儀式器であり、弥生時代前期までの日本列島、アステカ文明やアンデス文明と同様に、鉄は一切使用されなかった。

マヤ文明と先史・古代の日本列島の人々は、動物のミルクを飲まず、乳製品を食べない「ミルクの香りのしない社会」（安田 2009）を形成した。マヤ文明は、機械に頼らない「手作りの文明」であり、「牧畜なき人力の都市文明」であった。家畜は七面鳥とイヌだけであり、牧畜はなかった。リャマやアルパカのようなラクダ科動物もいなかった点は、アンデス文明と異なる。車輪付きの動物土偶が示すように、マヤ文明では車輪の原理は知られていた。しかし大型の家畜がいなかったために、荷車や犂は発達しなかった。現代人は効率を重視して、AI や電気製品など便利な機械を活用してできるだけ人間の力を使わずに短時間で効率的に仕事をこなそうとする。マヤ人は主要利器の石器を使って不自由なく作業し、ウシやウマなどの使役動物なしに建築物資を人力で運び、多くの人間を動員して手間と暇をかけて都市や巨大な公共建築を建設したのである。

古墳文化は、ほぼ全面的に鉄器を主要利器としたが、古墳は高度な技術を必要としない土築であり、都市的空間も存在しなかった[4]。新石器段階の技術で都市文明を達成したマヤに対し、金属器段階でありながら都市をもたなかった古墳文化という明瞭な対比がみられる。

古墳文化の鉄器は、農具・工具および武器・武具として生産や戦争のための基幹物資として使われ、装飾品や儀式器として用いられる青銅との間に役割分担があった。これら鉄製道具は技術と機能が絶え間なく革新され、とくに 5 世紀の武具の技術向上は迅速で、革新への志向は顕著な文化要素であった。車輪は発達しなかったが、5 世紀以降のウマの使用と半構造船の充実は、海陸の交

表１　マヤと古墳の文化的特質の比較

	マヤ	日本列島（古墳時代、古墳分布域）
面積	約38万㎢	約25万㎢
気候区	熱帯・亜熱帯	温帯
植生	熱帯雨林・熱帯サバンナ・ステップ(低地)、針葉樹林(高地)	常緑広葉樹林、落葉広葉樹林
主な生業	非大河灌漑農業、段々畑、家庭菜園および焼畑（トウモロコシ、豆など）	非大河灌漑農業(イネ)、畑作
大型家畜	なし	ウマ・ウシ
乳製品	なし	なし
主要利器の材質	石	金属（鉄・青銅）
移動手段	徒歩、カヌー	徒歩、馬、船
政治構造	複数の広域王国と小王国の形成が繰り返されたネットワーク型社会	有力な中央の政体群を核に、自立した地方の政体群がルースに結び合ったネットワーク型社会
モニュメント	石造の神殿ピラミッド、一部にレンガ・アドベ製神殿ピラミッド	土築の埋葬神殿（古墳）
都市的空間	あり	なし
独自の文字体系	あり	なし
独自の暦体系	あり	?
宗教体系	多神教	多神教

通や交易に大きな役割を果たした。ただし、古墳の建設も、多人数の単純な労力の集約によって達成された点で、マヤの公共建築と大きな違いはない。

⑤ 文字と暦　マヤ文明では文字（４万から５万）、暦、天文学が先スペイン期のアメリカ大陸で最も発達した(Martin and Grube 2008)。マヤ人は、古代インドに由来するアラビア数字が 10・11 世紀頃に西ヨーロッパに伝わる千年以上も前にゼロの文字を独自に発明した。文字の発達は、インカやナスカに代表されるアンデス文明の無文字社会と対照的である。

日本列島は、独自の文字体系をもつことのないままに大陸の文字体系（漢字）が波及し、その本格的受容も遅かった。漢字を刻んだ金石文が出てくる古墳時代の５世紀には、まだ限定的使用にとどまっていたが、６世紀以降には本格的な使用が始まり、文書や木簡などによって行政にも駆使されるようになった。

⑥ 多神教　マヤ文明と古墳時代後期以前の日本列島は多神教であった。天照大神とは対照的に、マヤの太陽神キニッチ・アハウは男性である。古典期の諸王は生きる太陽神であり、名前の一部にキニッチを含む王もいた。月の女神は、太陽神の妻であった（Miller and Taube 1993)。古墳もまた、被葬者を神格化する装置であり、諸王以下の有力者たちが神々の系譜に位置付けられ、これら多数の「ヒト神」の世界を上位で統括する絶対神は存在しない。

古典期の多彩色土器には、若く美しい月の女神が、月を意味する三日月形のマヤ文字の上に座り、ウサギを抱く図像が描かれている。マヤ人は、満月の表面に横向きのウサギを想像したが、ウサギはいうまでもなく女性の豊穣と多産のシンボルである。日本列島と同様、ウサギは月と深く関連していた。

⑦ 古墳とマヤの比較軸　デンマークの考古学者クリスチャン・トムセンが 19 世紀に唱えた石器時代、青銅器時代、鉄器時代の順に発展したユーラシアの三時代区分法は、日本列島の先史時代には比較的良く当てはまる。しかし、マヤやアステカなどのメソアメリカ文明やアンデス文明に適用できない。鉄器を用いずに主要利器が石器であったことは、マヤ文明がユーラシアの鉄器文明よりも「遅れていた」ことを必ずしも意味しない。「鉄器文明＝先進文明」という図式は、必ずしも成り立たない。それゆえ青山（2012）は、マヤ文明を洗練された「石器の都市・文字文明」と位置付けている。これに対して、上記の概観を踏まえると、古墳時代の日本列島は「都市なき金属器社会・限定的な文字文化」と呼べるだろう。

さらに具体的に、上記の概観をもとに、古墳とマヤの文化的特質の相違と相同を表１のように整理した。同じようにユーラシアを後にしたホモ・サピエンスが遠く離れた場所で同じころに形成した二つの文化の何が類似し、異なるのかを明らかにすることは、ホモ・サピエンスとそれが生み出した文化の本質を知ることにつながり、また、両文化の研究の深化にも貢献できるであろう。次章では、二つの文化や、以上に概述したそれぞれの特質がどのようなプロセスで形成されたのかを、両者が共有する顕著な特質であるモニュメント築造という事象を中心に、時系列的にあとづけてみる。

(2) 時期区分と年代的枠組

作業の前提として、両者の時期区分と年代的枠組みを

以下に示しておく。

マヤ文明のモニュメント（公共祭祀建築）が建造された時期は、先古典期中期（前 1000 ～前 350 年）、先古典期後期（前 350 ～前 100 年）、先古典期終末期（前 100 ～後 250 年）、古典期前期（後 250 ～ 600 年）、古典期後期（600 ～ 800 年）、古典期終末期（800 ～ 1000 年）、後古典期前期（1000 ～ 1200 年）、後古典期後期（1200 年～ 16 世紀前葉）である。

以上の各時期は、年代的には、日本列島の縄文時代晩期 / 弥生時代早期から室町時代に相当し、時期の境界も日本列島の時代・時期区分とほぼ合致する。これを踏まえ、本稿で用いる総合的な段階区分を、下記のように設定する。

Ⅰ段階：前 1000 年～前 350 年　…先古典期中期 / 弥生時代早期～前期

Ⅱ段階：前 350 年～後 250 年　…先古典期後期・終末期 / 弥生時代中期～後期

Ⅲ段階：後 250 年～ 600 年　…古典期前期 / 古墳時代

Ⅳ段階：600 年～ 1000 年　…古典期後期・終末期 / 飛鳥・奈良・平安時代前葉

Ⅴ段階：1000 年～ 16 世紀前葉　…後古典期 / 平安時代後葉～室町時代

2．モニュメントの形成と展開のプロセス

(1) Ⅰ段階：前 1000 年～前 350 年（先古典期中期 / 弥生時代早期～前期）

マヤ文明最古・最大のモニュメント　猪俣健や青山らはメキシコのタバスコ州で高解像度の航空レーザー測量や発掘調査を実施して、現在のところマヤ文明最古・最大のモニュメントをアグアダ・フェニックス遺跡で発見した（Inomata et al. 2020）。それは南北 1413m、東西 399m、高さ 15m の巨大基壇である（図 1 ）。その上に太陽の運行に関連した儀式建築「E グループ」、神殿ピラミッドや中小の基壇が建造された。5 世紀の大仙陵（仁徳天皇陵）の墳丘全長は 530m を超え、世界最長の墳丘墓である（福永 2020:240）。アグアダ・フェニックス遺跡の巨大基壇は、それを凌駕する世界最長のモニュメントといえよう。

巨大基壇は縄文晩期相当期の前 1000 年頃に建造され始めて前 800 年頃まで増改築された。その建造は、前 1200 年頃に一部の人々の間で定住生活と土器使用が始

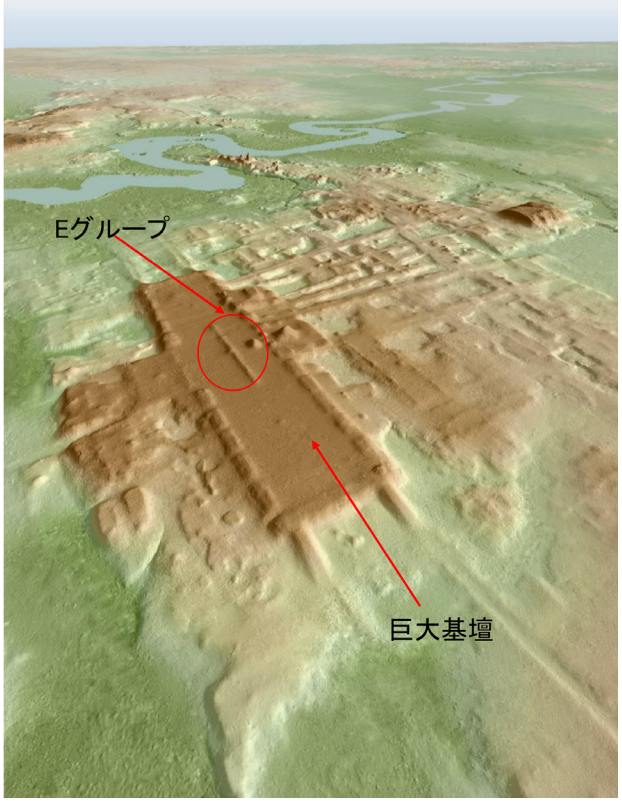

図 1　ライダーによるアグアダ・フェニックス遺跡の 3 D イメージ（猪俣健作図を改変）

まって間もない時期にあたり、箸墓の建造よりも 1250 年ほど前であった。定住した人もいた一方で、多くの人々が雨期と乾季に移住を繰り返す先土器時代からの生活様式を実践し続けた。巨大基壇を中心に幅 50 ～ 100m、最長 6.3km に及ぶ計 9 本の舗装堤道や人工貯水池が配置された。従来の学説では、マヤ文明は先古典期中期に小さな村々から徐々に発展したと信じられていた。アグアダ・フェニックス遺跡の調査成果は、その見直しを迫るものである。

アグアダ・フェニックスは、河岸段丘上の高地性大集落であった。巨大基壇は自然の起伏の上に建造され、体積は 320 万～ 430 万㎥と推定される。それは、これまで最大とされてきたグアテマラのエル・ミラドール遺跡の「ダンタ・ピラミッド」（体積 270 万㎥）や古典期のいかなる大神殿ピラミッドを凌駕する。つまり、このマヤ地域最古のモニュメントは、全マヤ文明史を通して最大の体積を有した建造物なのである。水平性を強調した巨大基壇とは対照的に、垂直的な古典期マヤ文明の神殿ピラミッドは、諸王の権力を誇示する政治的道具であった。古典期の神殿ピラミッドでは水平性だけでなく、むしろ高さ、つまり垂直性が強調された。神殿ピラミッドの建造・増改築は、マヤ

の山信仰と深く結び付いていた。古典期の神殿ピラミッドは、マヤ文字で「ウィツ（山）」と呼ばれた（Stuart 1997）。古典期のピラミッド状基壇の上の神殿へのアクセスは排他的であり、王など一部の支配層に限られた。

アグアダ・フェニックス遺跡の巨大基壇では王墓は見つかっておらず、古典期のように王を表象した石碑もない。モニュメント建築を計画・指揮する指導者は存在したが、中央集権的な王はいなかったと考えられる。王権が確立する前のマヤ文明黎明期には、人々の開放的な交流が可能な水平的な空間が好まれたといえる。巨大基壇は、人々が参加する共同体の祭祀の場であり、集団の統合・連帯感を演出するモニュメントであった。人々が共有したイデオロギーと社会関係を物質化したモニュメント建築の自発的な共同作業が、集団のアイデンティティを創生し、マヤ文明の起源と形成に重要な役割を果たしたのである。

巨大なモニュメントが建設されたことはマヤ文明黎明期だけでなく、アンデス形成期（前 3000 ～前 50 年）にもあてはまる（関 2015）。両者において王権が確立される以前に水平性を強調した巨大な方形基壇が建造・更新され、社会の統合を促した。文明発達の比較的初期に最大のモニュメントが建造された点において、マヤ文明、日本列島の古墳、テオティワカンやエジプトで共通点が見られる。モニュメントの大きさは、社会の規模・複雑さや経済の発展の程度とは必ずしも比例しないのである。

セイバル遺跡のモニュメント　弥生早期相当期の前 950 年頃に、グアテマラのセイバルでは大河パシオン川を望む比高 100m の河岸段丘上に E グループが建造された（Inomata et al. 2013, 2019）。このモニュメントは、石灰岩の岩盤を平らに削り取った公共広場、その東西に岩盤を整形して土や石を盛った 2 基の公共祭祀建築の基壇からなり、神聖なランドスケープを構成した。E グループは増改築され続け、前 9 世紀以降に石造の神殿ピラミッドを形成し、2000 年にわたって更新された。航空レーザー測量によって、遺跡中心部の「グループ A」でセイバル最大の大基壇を確認した。それは南北 600m、東西 340m の長方形であり、高さは 15m に及ぶ。発掘調査によれば大基壇の約 8 割が先古典期に増改築され、その上に E グループ、他の神殿ピラミッドや中小の基壇が建てられた。共同体の形成過程において、初期の公共建築の建設活動は従来考えられていたよりも盛んだったのである。

グアテマラ高地産の翡翠製磨製石斧・装飾品や海産ウミギクガイ製胸飾りなどの供物が E グループの公共広場の東西の軸線上に埋納された（Aoyama et al. 2017）。ウミギクガイ製胸飾りは、マヤ低地で最古の生首を彫刻した貝製装飾品であり、古典期の王が装着した生首を彫刻した胸飾りと酷似する。この海の貝製装飾品は、黒曜石・チャート製石槍及び戦争捕虜と考えられる殺傷痕のある成人男性の生贄墓と共にマヤ文明黎明期の戦争の証拠をなす。

アグアダ・フェニックスでも、セイバルと同様に E グループの公共広場の東西の軸線上に翡翠製磨製石斧を埋納する儀礼が執行された。図像学研究によれば、翡翠製磨製石斧はトウモロコシを象徴し、磨製石斧を公共広場に「植える」埋納儀礼は E グループを聖域として演出する上で重要であった（Taube 2000）。先古典期中期初頭の E グループは、マヤ文明の四方位や小宇宙の概念が既に形成されていたことを示唆する。初期のマヤ支配層は周辺地域との地域間交換に参加して、黒曜石や翡翠のような重要な物資、観念体系や美術・建築様式などの知識を取捨選択して権力を強化していったのである。

セイバル遺跡の調査は、マヤ低地における先土器時代の採集・狩猟による移動型生活から定住社会に移行する共同体の形成過程を明らかにした（Inomata et al. 2015）。居住の定住性の度合い、価値観やアイデンティティなどが異なる多様な集団が、共同体の公共祭祀及び公共広場や公共祭祀建築の建設・増改築（神殿・広場更新）を共同で行った。その過程で定住生活が確立されていき、集団が組織化された。公共広場で公共祭祀を慣習的に繰り返す実践によって、社会的結束やアイデンティティが固められていったのである。マヤ文明黎明期のモニュメントは、弥生時代の環濠集落が防御だけでなく、共同体の集団アイデンティティの観念的内容を演出するモニュメント（寺澤 2000）であったという点で類似する。一方、先古典期中期のマヤ共同体は、弥生時代のような農耕定住集落ではなかった。

マヤ文明黎明期の調査成果は、農耕定住共同体が確立し、安定的な食料生産と余剰生産物が大規模なモニュメントを生み出したという史的唯物論（唯物史観）の反証である。アグアダ・フェニックスやセイバルのモニュメントは、農耕定住共同体が確立される前から建設された。そして定住という新たな生活様式は、全ての社会集団の

間で同時に起こらなかったことが重要である。初期のEグループは従来考えられてきたような支配層の権力の象徴ではなく、むしろ公共祭祀の場であった。

先古典期中期には公共広場が公共祭祀の主要な舞台であり、古典期のように供物や支配層の墓は神殿ピラミッドではなく主に公共広場に埋納されたことが特筆される。先古典期中期に公共広場で繰り返し慣習的に行われた埋納儀礼を含む公共祭祀及び神殿・広場更新という反復的な実践は、社会的記憶を生成し、中心的な役割を果たす権力者の権力が時代と共に強化された。公共祭祀を形作り物質化したイデオロギーは地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用してマヤ支配層の形成に重要な役割を果たした。同様に古墳は社会関係・経済・軍事・イデオロギーという権力源のうちもっぱらイデオロギーという局面での中枢性を表示するものとして出現した（松木 2020b:258）。

弥生時代早期～前期のモニュメント　いっぽう、日本列島では、紀元前10世紀後半に朝鮮半島南部から水稲農耕が受容され、日本の時代区分ではここからが弥生時代早期となる。この段階のモニュメントは、西日本の環濠と、まだ縄文時代晩期の文化の中にある東日本の環状列石・環状盛土・環状貝塚などが対象となる。

まず、前800年頃に築かれた最初の環濠として、北部九州玄界灘沿岸の福岡市那珂遺跡が知られている。標高11 mの独立した低台地上に二重に巡らせたもので、外側環濠の外径が約150 m、内側環濠の外径が約125 mと復元される。外側環濠は幅6～7 mで深さ約4 m、内側環濠は約3.5 mで深さ2.3～2.5 mと想定され、両環濠から掘り出した土を土塁として盛り上げたとすると、径約160～170 m（外土塁の場合）という未曽有の規模をもって独立台地上に現れた巨大な土築構築物であり、明確なモニュメント性を帯びていた。その後、同じ地域に有田七田前遺跡、板付遺跡というさらに大きな環濠・土塁が現れ、前500年くらいまでの間、これら環濠土塁形のモニュメントが地域統合の中核として機能した。

時期の後半には、北部九州の周辺地域から山陰・瀬戸内を経て畿内・東海までの主要地域に環濠・土塁が点在する。それらは、①住居域を囲むもの、②貯蔵域を囲むもの、③空閑地や特殊な建物を囲むものなど多様であるが、居住集団のアイデンティティの誇示、収穫物の儀礼、聖域の演出など、さまざまなコンテキストでモニュメント性を発揮したであろう。これらは、垂直性よりも水平性を強調し、特定の個人とは結びつけられないことから、まだ階層性が顕著でない共同体のアイデンティティを演出する機能をもっていた。

(2) II段階：前350年～後250年（先古典期後期・終末期 / 弥生時代中期～後期）

「予期せぬ結果」の巨大神殿ピラミッドと最初の王陵

「はじめに神殿ありき」のアンデスでは先土器時代から公共祭祀建築（神殿）が建造された（関 2015）。対照的にマヤ文明では「はじめに土器ありき」であった。土器の次に公共祭祀建築が建造され、その後にトウモロコシ農耕定住が定着し、さらに後に文字や都市が発達した（青山ほか 2019）。弥生時代の日本列島の農耕定住村落とは異なり、先古典期中期には農耕を生業の基盤にしていなかった。セイバル遺跡の86体の人骨の同位体分析によれば、トウモロコシが主食穀物になったのは先古典期後期前葉の前300～前150年であった（Palomo 2020）。それは、セイバルで全ての社会階層の人々が定住・集住して都市が形成された時期であった。

マヤ文明では都市がアンデスよりも数百年早く発達した。先古典期後期にはマヤ低地で定住化が進み、都市が形成されていった。アンデスの形成期末期に神殿の建設が停止した。形成期の神殿を中心にした社会展開は、その後の王都を中心とする社会発展に直線的につながらず（関 2006, 2017）、数千年にわたって神殿を中心に社会が統合され、大規模に集住しない社会伝統が続いた。アンデスと比べると、マヤ文明では最初の公共祭祀建築の建設から比較的短期間で都市が発展した。つまり、マヤ文明の神殿更新は資源化されて、都市を中心とする社会発展につながったのである。

エル・ミラドールは、弥生中期・後期相当期の先古典期後期・終末期の大都市として栄えた。「ダンタ・ピラミッド」は、高さ72m、底辺620 × 314mという際立った垂直性と水平性を誇った（Suyuc and Hansen 2013）。先古典期の巨大神殿ピラミッドは、神殿・広場更新や公共祭祀を共同で繰り返し行う実践の「予期せぬ結果」として建造された（Joyce 2004）。「ダンタ・ピラミッド」は前200～後150年頃に増改築されたが、王墓は見つかっていない。先古典期中期・後期の巨大な公共祭祀建築は王や王家の重要人物を葬り祭るモニュメント「王陵」（都出 2000）ではなく、人々が神々と人々のために築く非王墓型のモニュメントであった。神殿ピラミッドの外壁を

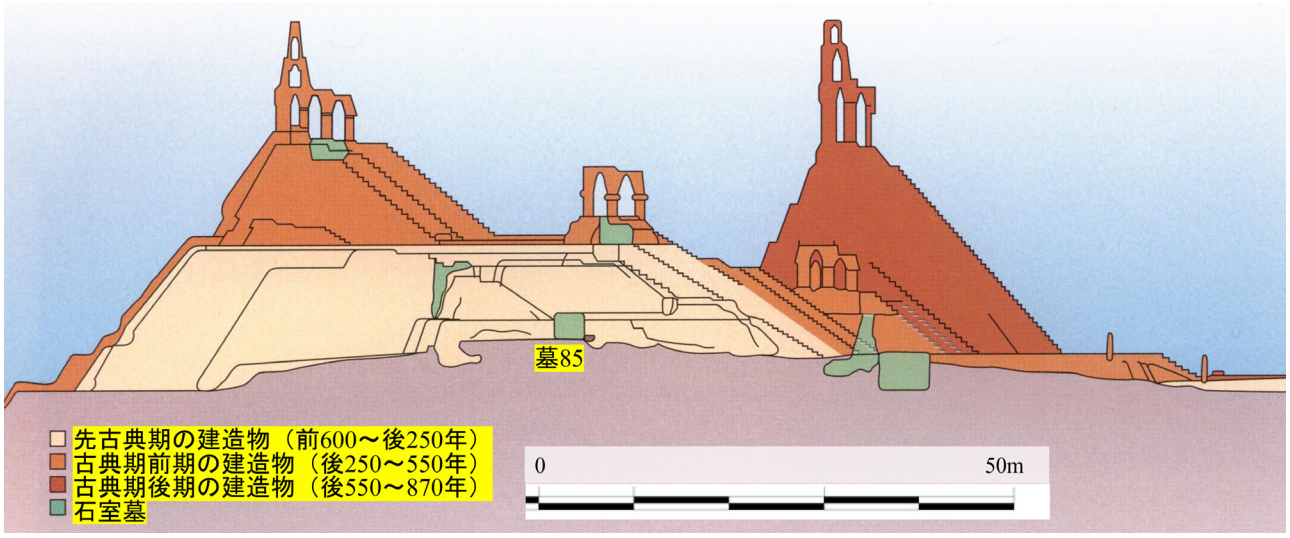

図２　ティカル遺跡の北のアクロポリスの神殿更新と石室墓（Culbert 1993 を改変）

装飾した神々の漆喰彫刻は、人々に「見る / 見せる」という効果を発揮した。ピラミッドは特定の個人のためではなく公共性が強かった。

現在のところ最古のマヤ文字の碑文は、グアテマラのサン・バルトロ遺跡の前３世紀の壁画に記されている（Saturno et al. 2006）。壁画には、アハウ（支配者・王）の文字、王の事績を記した碑文やトウモロコシの神が描かれた。しかし、マヤ文字が発達した古典期と比べると、先古典期後期・終末期には一握りの支配層が読み書きした文字よりもむしろモニュメントが「見る」人々を突き動かし、さらに巨大なモニュメントを建造して社会を動かす仕組みとしてより重要な役割を担った。支配層は「語り」よりも「見せる」行為、つまり神々と交信する儀礼空間の視認性と大衆性により重点を置いたといえよう。

ティカルの「北のアクロポリス」は、神殿更新が行われ続けて複数の神殿ピラミッドを頂く、底辺 100 × 80m の巨大な建築複合体である。発掘調査では、古典期の５つの床面の下から、先古典期の 12 の床面および一連の石室墓が見つかった（図２）。弥生後期相当期の１世紀の初代王の墓と考えられる「墓 85」は、目や歯の部分に海産ウミギクカイを埋め込んだ硬質の緑色石製仮面、王族が放血儀礼に用いたアカエイの尾骨、ウミギクカイ製装飾品、26 点の土器など副葬品が豊富である（Coe 1990 II:217-220）。先古典期終末期の豊かな副葬品を伴う王墓は、既に階層化されていたマヤ社会の一面を示す。

「予期せぬ結果」として巨大化していく神殿ピラミッドは、先古典期終末期に人々の公共祭祀の場ではなくなり、王が自らの権力を生成する政治的装置として巧みに利用し始めた。王は神殿ピラミッドで宗教儀礼を執行し、神殿ピラミッド内に王墓を設けて自らやその出自集団をモニュメントと結び付けた。先古典期終末期と古典期の多くの神殿ピラミッドは王が宗教儀礼を執行する舞台としてだけでなく、巨大化した前方後円墳と同様に墓と特定の有力者の結びつきを強調する王陵としても機能したのである。上位の古墳と同様に、マヤの王・王族の遺体に大量の水銀朱が撒かれたことが共通する。

巨大なモニュメントの建設・維持は、王の強制力によってのみなされたのではない。マヤ文明の都市形成の要因の一つとして、巨大な宗教建造物の必要性を人々に納得させる王権・宗教などの新しいイデオロギーが発達したと考えられる。新しいイデオロギーは王権を正当化し、人口の集住と都市建設の大きな原動力になった。支配層の指揮下、農民たちが農閑期に「お祭り」のような行事として、楽しみながら建設にたずさわったのだろう。人口の集中によって支配層の権威・権力が強化された。同時に経済活動が活発になり、より多くの人々を都市に引き寄せるという相乗効果があったといえよう。マヤ文明は、従来考えられていたよりも早い段階から複雑化しており、先古典期の文化的蓄積と継承が古典期の諸王国を誕生させたのである。

環濠の多重化と埋葬壇の出現　いっぽう日本列島では、北部九州から山陰・瀬戸内および近畿・東海にまで分布

を広げていた環濠・土塁が、累積的に多重化を始める。そのピークはこの段階の中ごろに当たる弥生時代中期後半の前１世紀で、島根県田和山遺跡、大阪府池上曽根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、愛知県朝日遺跡などで、環濠の拡大や多重化が進んだ。

田和山遺跡は、前段階末の前４世紀に、標高 46m を測る独立丘の中腹斜面に、尾根部分で３か所が途切れる１重の環濠と土塁を巡らせ、それに囲まれた頂部は 30 × 10 mの狭い平坦面となって、端に物見櫓か神殿とみられる心柱付建物が設けられた。その後、環濠・土塁は途切れのない形に改修され、さらに弥生中期後半の前１世紀には３重に増強されて、頂部の中央に大型の心柱付建物が立てられた。池上曽根、唐古･鍵、朝日などでも、環濠の拡張や多重化、神殿の造営など、モニュメントの累積的充実が進んだ。マヤを始めとしてアメリカ大陸に一般的にみられる累積的拡大が日本列島でもっとも顕著となったのが、この段階の環濠土塁形モニュメントである。それらが特定の個人とは結び付けられず、共同体のアイデンティティを表出する媒体であったことも、先古典期中期（Ｉ段階）のマヤと共通している。

同時に、後の古墳につながるエリート層の墳墓もこの時期から発展した。前１世紀の北部九州では、いち早くチーフダムの連合が形成され、福岡県須玖岡本・三雲南小路など、有力チーフの厚葬甕棺の上を一辺 30 mほどの方形の封土で覆った墓が築かれる。近畿中央部および北部、東海、関東でも、一辺 25-30 m級の方形の墳墓が築かれた。大阪府加美 Y-1 号では、25 × 15 m、高さ３mの長方形の土壇（墳丘）をまず築いてから、その上面の広場を埋葬面として墓壙を掘って木棺を埋め、ほぼ木棺の容積分に当たる残土を上に盛り上げて土饅頭としたものが 23 基あり、少なくともその一部は木製の墓標を立てていたようすが復元された（田中編 2015）。つまり、高さ３mの大きな土壇を築き、その上に墓の土饅頭を並べていく「埋葬壇」としてのモニュメントが、前１世紀の近畿中央部には登場した。東海や関東でも同様であった可能性が高い。

弥生後期（後 25-250 年）になると、埋葬壇は各地で発達する。もっとも顕著かつ広範な特徴は、これらのうち大きくて高いものには埋葬儀礼を行う壇の頂上に至るスロープ通路（突出部：のちの「前方部」）が取り付くことである。西日本では、山陰中～東部に、方形の本体の四隅に通路を付け、石で葺いた埋葬壇（四隅突出型墳丘墓）が分布する。瀬戸内にも、円形の本体の両側に二つの通路を付けて石で葺いた大型の埋葬壇が現れる（岡山県楯築遺跡）。これらは、通路の前端が石列などで塞がれ、壇上へのアクセス制限が象徴化された。東日本では、方形の埋葬壇に１つの通路が取り付く形が主流であるが、総じて小規模で、より下位の階層にまで通路付の埋葬壇が普及した。なお、東西日本ともに、通路の付かない円形または方形の埋葬壇も多く、それらは比較的小型で、通路の付いた大型の埋葬壇を中心に群在する傾向がある。こうした群は一つの出自集団の墓域とみられ、埋葬壇の規模や通路の有無によって出自上の地位を表示したと考えられる。

(3) Ⅲ段階：後 250 年～ 600 年（古典期前期 / 古墳時代）

神聖王と文字の発達　古典期マヤ文明では、先古典期に主に社会の紐帯を促したイデオロギー操作が、より独占的・排他的なイデオロギーに変遷した。王朝や歴代の王の事績を称える碑文や王の図像が石碑に刻まれ、他の支配層や民衆に誇示して「語り / 見せる」効果が発揮された（青山 2013）。王の図像は宗教儀礼の神聖王として表象される場合が多いが、偉大な戦士として表象されることもあった。マヤ文明が石彫の文明であったのとは対照的に、古墳時代には特定の権力者の写実的な人物埴輪が形象された。若狭徹（2017:157）は、東国で好まれた小札甲着装の武人埴輪立像は、亡き首長の生前の軍事活動とその武威を強調したものと考える。古典期マヤの諸王は、その存命中に碑文と英雄戦士の図像で戦争の勝利と武威を石碑に記させて自らの王権を正当化・強化したのである。

古典期マヤ文明では、「見る」人々を突き動かしたモニュメントに加えて、「語り」が王や王朝といった特定の個人・集団の利益を優先させる目的に先鋭化し、「語り」を物質化した文字が社会を動かす仕組みを提供して王権を強化した。4 世紀末までに有力な王朝が神聖王の称号である紋章文字を記すようになった。紋章文字では、ヘンは「クフル（神聖な）」、カンムリは「アハウ（王）」と解読されている。つまり、ある王国のクフル・アハウと記された。古典期マヤ文明の諸王は単なるアハウ（支配者）ではなく、文字通り神聖王になったのである。紋章文字の使用は、初期には有力な王朝に限られていたが、時代が下がるにつれてかなり広く用いられるようになった（Martin and Grube 2008）。数万人の人口を擁した都市

群は、神聖王を頂点とする政治・経済・宗教の中心地として栄えた。

神殿ピラミッドの外壁は神々の顔だけでなく、王の図像を彫刻した多彩色の漆喰彫刻や石彫で装飾され、王の雄姿や偉業を刻ませた石碑が公共広場に建立された。王や貴族が公共広場に集まった大衆を前に公共広場や神殿ピラミッドで劇場型の国家儀礼を行った。儀礼的踊りや音楽といった、王や貴族の劇場的パフォーマンスは、王権を強化する上で重要であった。マヤ文明には、劇場国家的な側面があったのである（Inomata 2006）。

上述のように、神殿ピラミッドはマヤ文字で「ウィツ（山）」と呼ばれた。神殿ピラミッドは、文字通り山信仰と関連する宗教施設であり、神格化された先祖の神聖王や神々が宿る人工の神聖な山を象徴した。日本列島をはじめ世界の様々な人々の山信仰と同様に、マヤ人は自然の山を崇拝したが、マヤ低地は比較的平坦なので人工の神聖な山を建造したのである。マヤの山信仰は、洞窟信仰と深い関係があった。暗い洞窟は神聖な山の空洞や内部を象徴し、過去から現在までのマヤ人にとって宗教的に重要な場所である。洞窟信仰は豊穣、生命や創造の観念と密接に関連する。ピラミッド状基壇の上の神殿の入口は、洞窟、超自然界や地下界への入口を象徴した（Stuart 1997）。神聖王は、神殿の部屋に入って宗教儀礼を執行し、神々と交流した。

諸王はピラミッドを神聖な山の象徴とし、神殿を地下界への入口の洞窟になぞらえ、神々と人間の仲介者として自らの権威と権力を人々に認めさせた。神殿ピラミッドは王がまつりごとを行う舞台でもあり、王は神殿ピラミッドの内部に様々な供物を埋納した。古典期の神殿更新は王権を象徴する政治的道具になり、王権を強化するために各王朝が競った政治的な宣伝活動でもあった（青山 2018）。諸王は先代の王を神格化して神殿ピラミッドや王宮の内部の石室墓に翡翠製装飾品、海の貝製装飾品、彩色土器のような豪華な副葬品と共に埋葬したが、武器や武具は副葬されなかった。古墳時代の神殿では、武器・武具を副葬して英雄的世界観を演出した（松木 2019b:12）。対照的にマヤの諸王は英雄戦士としてではなく、宗教儀礼を執行する神聖王として葬られた。古典期マヤ文明の諸王は神々と特別な関係を持ち、神格化された先祖からの系譜を強調した。

墳丘の巨大さに比べて、支配層の居館や城塞集落の発達が不十分なのが古墳時代の大きな特徴であり、有力な個人の葬送儀礼の場である古墳築造に多くの労働力が投入された（福永 2020:251）。対照的にマヤでは、古墳時代相当期の古典期前期に初期国家の特徴の１つとされる王宮が多くの労働力を動員して建造され始めた（Feinman and Marcus 1998）。王宮は、都市中心部で王が行政に従事する官邸であった。その大きさは様々であるが、複数の部屋をもつ石造建築であり、王、王族や直近の従者が住んだ。神殿と王宮の両方を兼ねるピラミッドも存在した。

神殿としての「古墳」　弥生後期の埋葬壇形モニュメントは、３世紀に入る頃から奈良盆地を中心に大型化し、円形または方形の埋葬壇に一つの通路が付く形に統一される。250年前後に築かれたとされる箸墓は、５段に盛った高さ 30 mの円形の埋葬壇に、前端が急斜面となって閉ざされた通路をもつ。このようなものを、日本考古学では「前方後円墳」とよび、本体が方形の「前方後方墳」や、通路のない埋葬壇（「方墳」「円墳」）とともに「古墳」と総称する。

これらは、弥生時代の埋葬壇を２～５段重ねることで高さを演出するべく発展した点で、エジプト古王国におけるマスタバからピラミッドへの展開に似る。頂上を、神（被葬者）を祀る空間として埴輪列で飾り、しばしばそこへの通路（前方部、マヤの神殿の階段に相当）が表現された儀礼のための壇、という点でマヤの神殿と形態的表現を同じくすることからも、これを、葬送のための「神殿」とよぶことも可能であろう[5]。以下、いささか実験的な叙述法となるが、「古墳」を「神殿」と記述することで、マヤと同一地平での古墳の理解を試みたい。

神殿の造営は、３世紀後半から４世紀中葉にかけて、九州から東北南部までの有力出自集団の間に広まった。出自上の最上位者が最大の神殿に葬られ、次位以下の中小の神殿群がその周囲に配置されるモニュメント群（古墳群）としての形をなす。このような群が、小水系ごと、すなわち４～５km の間隔をもって並列する。最上位者の神殿は高さ３～５ mを基本とするが、いくつかの地域では高さが 10 mを超え、さらに近畿中央部の奈良盆地には、高さが 20 ～ 30 mで径が 100 m～ 200 mに達するものが築かれた。

４世紀後葉から５世紀にかけて、各地の神殿群は再編・統合され、南九州の日向（西都原古墳群）、瀬戸内の吉備（造山古墳群）、近畿の河内（古市古墳群・百舌鳥古墳群）、大和（馬見古墳群・佐紀古墳群東群）、北関東の

毛野（太田天神山古墳）など、水系を超えたより広い地域ごとに大規模で階層的な神殿群が現れる。これらは、自立的な政体の王を核とする支配領域を形成したが、なかでもひときわ大規模な神殿群を営む河内の二つの出自集団（古市・百舌鳥）は、神殿のスタイルや儀礼の内容を各地の地方政体と共有し、副葬される威信財の流通をコントロールすることによって、ゆるやかな中央性を獲得していた。

威信財は、4世紀中ごろまでは鏡、儀礼用の石製品、武器と多様であったが、4世紀後葉から5世紀には武具に斉一化され（松木 1996）、王たちは軍事指揮者の姿で神格化された。この時期の列島内で恒常的な戦闘があった可能性は低い一方で、朝鮮半島諸政体との軍事的な緊張関係が記録されている。このような対外的緊張を背景に、王たちは軍事的な権威を伸ばしたと考えられる。ただし、対外戦争そのものの考古学的証拠は微弱で、副葬される武具に使用痕跡が認められないことから（橋本 2020）、王たちは、実際の軍事活動ではなく、それを象徴化した神殿での儀礼を、権威伸張の最大の手段とした。

6世紀に入ると、このような神殿としての「古墳」の性格は大きく変質した。地表または半地下に設けた墓室を封土で覆うという、中国や朝鮮半島から伝わった「封土墓」が、神殿にとって代わるのである。遺骸を地下（封土の底）に埋め込む封土墓は、天に近い頂上に遺骸を差し上げる神殿とは異質の世界観の産物である。高く造る必然性のなくなった封土は縮小し、封土下の石室がエラボレーションの対象となって大型化や装飾が進む。神殿から、東アジア共通の封土墓へと交替した。このモニュメントの交替は、日本列島固有の世界観が東アジアのグローバル・スタンダードに塗り替えられたことを意味し、「古墳」後の新しい段階へと社会を変化させる起点となった。

(4) Ⅳ段階：600 ～ 1000 年（古典期後期・終末期 / 飛鳥・奈良・平安時代前葉）

王権と世界観　古典期後期・終末期（600 ～ 1000 年）のマヤ低地では、人々が世代を超えて有力者のために巨大なモニュメントを建造・増改築し続けた。弥生時代後期の有力者の大型墳丘墓や大王の巨大前方後円墳と同様に、古典期後期には一人の大王のために短期間で王陵の神殿ピラミッドも建造された。たとえば、パレンケ遺跡の「碑文の神殿」は大王パカル（615 ～ 683 年統治）の王陵として 676 年頃から一代で建設された（Guenter 2007）。

マヤの諸王は、生ける太陽神でもあった。暦と天文学の知識は王権を正当化する政治的道具として活用され、都市計画やモニュメントの配置・意匠、農耕や宗教儀礼の年間計画に役立った。諸都市では神殿ピラミッドなど重要なモニュメントが天文観測や暦に基づいて配置された。パレンケの諸王は、王権を正当化する政治的道具として太陽を積極的に活用した（Stuart and Stuart 2008）。冬至の 12 月 21 日には、「碑文の神殿」の後ろを太陽が地下界に入っていくかのように沈むのが、「宮殿」の四重の塔から観察される。また冬至の午後には一年で一回だけ、太陽が「十字の神殿」の正面と内部をスポットライトのように照らし出す。父の 11 代目パカル王から息子の 12 代目キニッチ・カン・バフラム王（684 ～ 702 年統治）へ王権が移った歴史的事実を、象徴的に演出したのである。これは古墳の葬送儀礼が被葬者と後継者の社会的地位や権威を示し、承認を得た（和田 2019:49）のと共通する。

ティカル 26 代目ハサウ・チャン・カウィール王（682 ～ 734 年統治）は、695 年にティカル王朝の長年の宿敵カラクムル王朝との戦争に勝利した（Martin and Grube 2008）。戦争の勝敗は王朝の盛衰に大きく影響した。ハサウ・チャン・カウィール王は、「神殿 5」（高さ 57m）、「大広場」を挟んで東西に「神殿 1」（高さ 47m）と「神殿 2」（高さ 38m）などを一代で建造させた。ハサウ・チャン・カウィール王の遺骸は、「神殿 1」内の壮麗な石室墓に埋葬された。王陵であった「神殿 1」のピラミッド状基壇はパレンケの「碑文の神殿」と同じ 9 段であり、9 層の地下界を象徴する。王の超自然的な権威・権力は、大量の翡翠製品や海産ウミギクカイや真珠製の装身具などの威信材の副葬によって正当化・強化された。奈良時代相当期の 734 年に即位した 27 代目イキン・チャン・カウィール王は、近隣の都市との戦争に次々と勝利し、古典期マヤ文明で最大の「神殿 4」（高さ 70m）を建造させた。

「エル・カスティーヨ」は、メキシコの世界遺産チチェン・イツァ遺跡最大の神殿ピラミッドである。高さ 24m のピラミッド状基壇の 4 面には、それぞれ 91 段の階段があり、ピラミッド状基壇の上にある高さ 6m の神殿に続く階段 1 段と合わせて計 365 段となる。「エル・カスティーヨ」は、365 日暦、つまり太陽暦のピラミッドであった。またピラミッド状基壇の各面には 52 の壁

龕があり、メソアメリカの 52 年周期暦の数と一致する（Carlson 1981）。春分と秋分の日没の一時間ほど前に「エル・カスティーヨ」北側の階段に当たる太陽の光と陰とが、風と豊穣の神ククルカン（羽毛の生えた蛇神）を降臨させる。ピラミッド全体が磁北から 17 度ほど傾けて建造された。それは長さ 34m ほどの「光の大蛇」が空から降臨するように設計された壮大な政治的装置であった。生ける太陽神であった王、貴族と都市住民が強力な宗教的体験を共有したのだろう。太陽と蛇の崇拝は、古代日本の『古事記』と共通する（山口・神野訳 1997）。

ユカタン半島では、石灰岩の岩盤が陥没して地下水が露出した天然の泉セノーテが数多く分布するが、セノーテが都市計画や神殿ピラミッドの位置を決める上で重要な役割を果たした。大地と水が交わるセノーテは、豊穣を象徴した。「エル・カスティーヨ」の地下を三次元探査したところ、ピラミッドの真下からセノーテが見つかった（Chávez et al. 2018）。「エル・カスティーヨ」はセノーテの真上、チチェン・イツァ最大のセノーテと二番目に大きなセノーテの間に建造された。セノーテの神聖性が神殿ピラミッドの重要性を増し、王権を正当化・強化した。マヤ人は、都市という大地の中心に大きな神殿ピラミッドを建造して、天上界、地上界、地下界を連結する世界観を物質化したのである。

封土墓から瓦葺建造物へ　「古墳」が神殿から封土墓へと変質することで、規模は小型化した。同時期のマヤでは有力者のための巨大なモニュメントの建造や増改築が続くのに対して、日本列島はそれとは異なった歩みを始めたのである。

奈良時代に入る 7 世紀末～ 8 世紀初頭には、中国から導入した文字使用が本格化し（木簡）、それによる法（律令）や世界宗教（仏教）を媒体として東アジアのグローバルな世界観の傘下に入り、それに根ざした「国家」という社会体制が、諸政体を最終的に統合する形で確立した。封土墓に代わり、国家のシステムを可視的に物質化した寺院や都宮・国衙・官衙・城柵などが現れ、それらを様式的に特徴づける瓦葺建造物が、主要なモニュメントとして各地に展開した。このように、日本列島のモニュメントは、葬送神殿から封土墓へ、そして瓦葺建造物へと、完全に更新されたのである。神殿ピラミッドを建造・更新し続けたマヤとは、まったく異なる世界観とその物質的表現に塗り替えられることになった。

(5) V 段階：10 ～ 16 世紀前葉（後古典期 / 平安時代後葉～室町時代）

後古典期のモニュメント　後古典期（1000 年～ 16 世紀前葉）には戦争が頻繁に行われ、石槍に加えて弓矢が重要な武器になった。芸術や建築には古典期の壮麗さはなかったが、遠距離交換網がさらに発達して商業活動が盛んになった。マヤパンは 4.2㎢の区域が石造の防御壁に囲まれた城塞都市であり、15 世紀半ばに戦争によって破壊されるまでマヤ低地北部最大の都市として繁栄した。マヤパン最大の「エル・カスティーヨ」（高さ 15m）は、チチェン・イツァの同名の大ピラミッドを小規模に模倣した非王墓型の神殿ピラミッドであった（Milbrath and Peraza Lope 2003）。古典期の超自然的な権威をもつ神聖王に代わって、後古典期の商業志向の王は古典期のような大神殿ピラミッドの建設に執着しなくなったのである。

瓦葺建造物の諸世紀　国家が成立し、文字による制度や宗教教義が社会や文化をつかさどる比重が高くなると、モニュメントが知覚や感情を通じてその世界観を人びとの心や身体に内在化させる局面は限定されてくる。しかし、寺院を主とする瓦葺建造物は、その後長く各地でモニュメント性を持ち続け、律令体制溶解後のいわゆる王朝国家、平氏政権期から鎌倉時代以降の武士による封建国家、およびその分裂と再編成の段階に当たる南北朝動乱期から戦国時代にかけても、権力者によるパトロネージのもとで造営が繰り返された。

封建国家の再編成が進行した 16 世紀にも、権力者のパトロネージによる寺院や神社の造営が続く一方で、権力者そのものの軍事的・政治的威信となると同時に、領主としての格付けの表示としても働く瓦葺の城郭建築が各地に造営された。江戸時代には中央の権力機構（幕府）による規制を受けながらも維持された。

3．考察

マヤと日本列島におけるモニュメントの、約 2500 年間にわたる歴史的展開を、対照しながら比較してきた。その結果、相互の共通性と違いの整理から、そのプロセスとメカニズムに関する以下のような時間的・空間的視点が抽出できる。

(1) 時間的視点

① 階層化とモニュメントの基本形　マヤ文明では水平

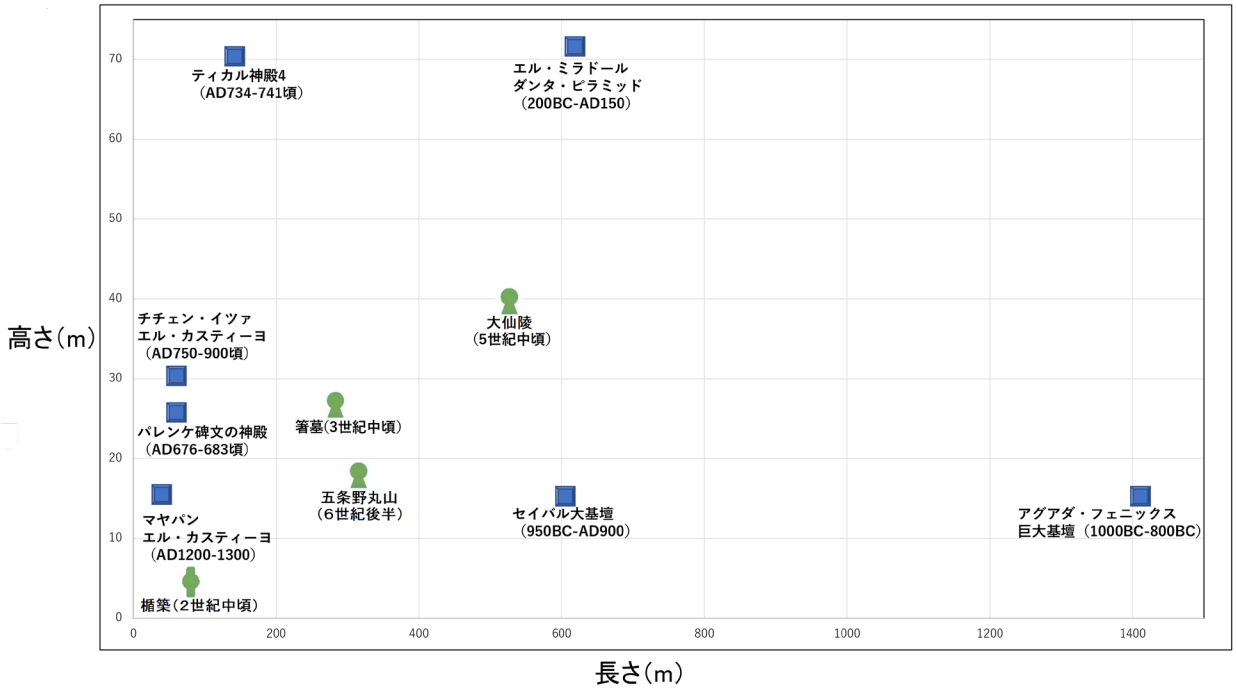

図3　マヤと古墳のモニュメントの長さと高さ

性を強調した非王墓型の巨大基壇（Ⅰ段階：先古典期中期）→　垂直性と水平性が際立つ非王墓型の神殿ピラミッド（Ⅱ段階：先古典期後期）→　一部が王陵の神殿ピラミッド（Ⅱ段階：先古典期終末期）→　垂直性を強調する王陵の神殿ピラミッド（Ⅲ～Ⅳ段階：古典期）→小規模で低い非王墓型の神殿ピラミッド（Ⅴ段階：後古典期）へと変遷した（図３）。水平性を強調した巨大基壇から垂直的な高い王陵の神殿ピラミッドへと変化した後に、神聖王に代わる商業志向の王によって小規模で低い非王墓型の神殿ピラミッドが後古典期に建造された。

日本列島でも、水平性を強調した環濠・盛土（Ⅰ～Ⅱ段階：弥生時代早期～後期）→垂直性を盛り込み始めた埋葬壇（Ⅱ段階：弥生時代中期～後期の「墳丘墓」）→葬送神殿（Ⅲ段階：古墳時代）と、水平性を強調したものから垂直性を加えたものへと変化した。

このようなモニュメントの基本形の変遷プロセスは、人類史において普遍的である。物理的な空間関係を社会関係のアナロジーとして表したモニュメントは、社会が階層化するにつれて、水平性から垂直性の表現を基調とするようになる（松木 2009）。垂直性の強調は、両地域ともⅡ段階（先古典期後期・終末期 / 弥生時代中期～後期＝前 350 年～後 250 年）に始まり、Ⅲ段階（古典期前期／古墳時代＝後 250 ～ 600 年）までにともに諸王が神殿に祀られる階層社会を形成した。

② モニュメント様式の連続と不連続　一次文明のマヤではほぼ一貫して神殿ピラミッドや基壇とよばれる方形基調のモニュメントの伝統がⅠ段階からⅤ段階までの 2500 年ほど続くのに対し、日本列島ではモニュメントの形が数百年単位で更新された。本稿では対象外となる縄文時代には、主として後期（前 2500 ～ 1200 年）と晩期（前 1200 ～ 950 年）の東日本を中心に、ストーンサークルや周堤状盛土が築かれる。Ⅰ段階の弥生時代早期～前期には環濠・土塁が現れるが、Ⅱ段階の弥生時代中期～後期には埋葬壇（墳丘墓）という別の様式が出現し、Ⅲ段階の古墳時代に神殿（古墳）へと発展したあと、この段階の末から次のⅣ段階初頭には封土墓に変質する。さらに、７～８世紀にはまったく新しい様式のモニュメントである瓦葺建造物（仏教寺院・都宮・官衙・城柵）に交替する。

日本列島でモニュメントの様式が更新されるとき、新たなモニュメントはいずれも大陸から伝わってくるものである。環濠・土塁は水稲農耕とともに朝鮮半島から伝わり、埋葬壇から神殿の発達は東アジア全般で生じた墳墓の大型化の一環で（「東アジア墳墓文化」、松木 2019a）、封土墓への変質や瓦葺建造物への交替もまた、大陸からの文化伝播によるものであった。このようなモニュメント様式の頻繁

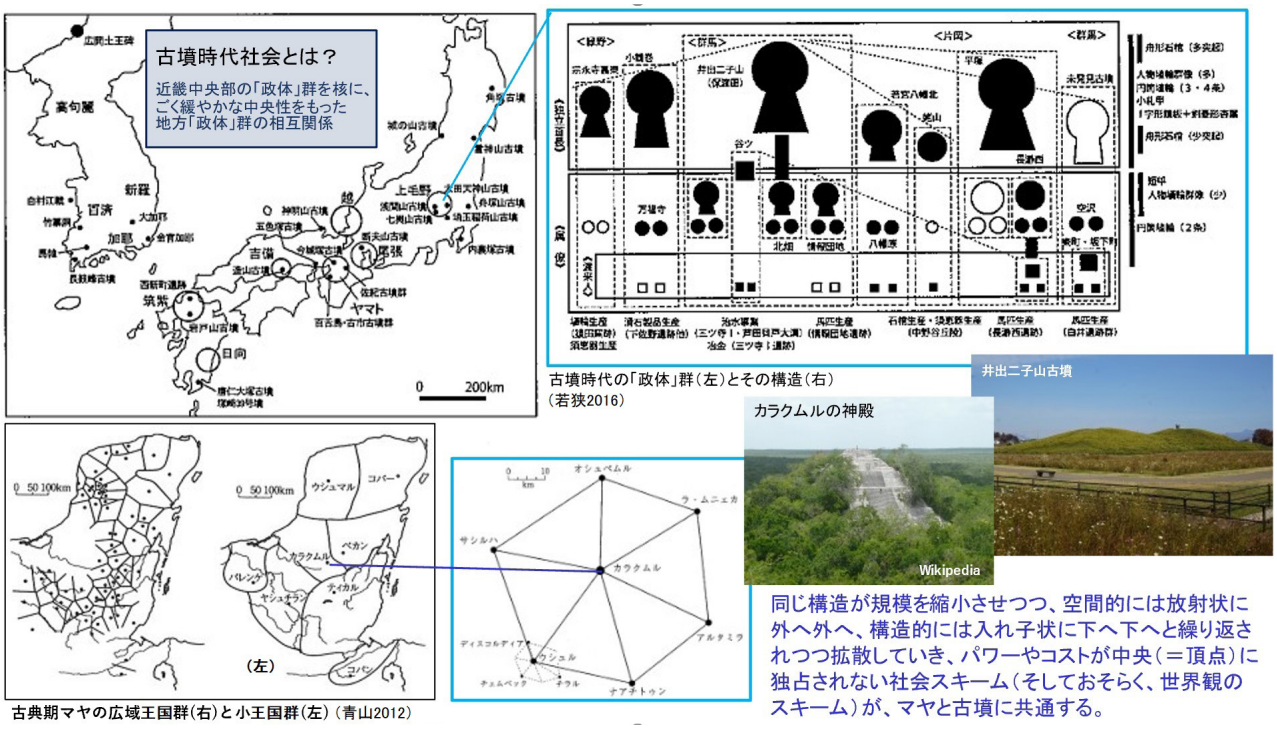

図4　モニュメントと都市からみた古墳とマヤの空間構造（若狭 2016, 青山 2012 より）

な更新は、一次文明のマヤに対する二次文明としての日本列島の歴史的特質の表れで、後で述べる両地域間の社会変化のパターンの差異と密接に関連している。

(2) 空間的視点

① モニュメントの形状と構造 マヤの神殿ピラミッドと、日本列島における最盛期のモニュメントである葬送のための神殿（古墳）は、頂上を儀礼の場とし、しばしばそこに至る登路（前方部）をもつ点で、空間的コンセプトは同じくする。古墳を含む東アジア墳墓文化の多くが、遺骸を低い位置に埋め込む封土墓であるなかで、このような葬送神殿の構造は列島固有の展開であった。マヤでは神殿ピラミッドが「ウィツ（山）」と呼ばれ、神格化された先祖の神聖王や神々が宿る人工の神聖な山を象徴したように、古墳を代表する前方後円墳も二つの峰をもつ山とみなされていた可能性が高い。上下の階層構造は、ヒトが生み出す世界観にしばしばみられるパターンの一つであり、マヤと古墳との間で、直接のつながりはないけれどもヒトの認知の普遍性に根ざして共通化したと考えられよう。

ただし、マヤの神殿ピラミッドが洞窟信仰を含み、上部の神殿の入口が超自然界や地下界への入口でもあったのに対し、神殿としての古墳には、洞窟や地下にまつわる象徴性は見出せない。いっぽう、封土墓に変質した後の横穴式石室は「洞窟」のアナロジーとして地下界を演出した可能性が高い。すなわち、山とみなした墳丘の頂上を焦点とする神殿から、封土の底の地下を重視する封土墓へと空間的コンセプトが転換することで、大陸の世界観と同化したのである。マヤには見出しがたいこうした世界観の転換とモニュメント様式の更新が、前述のように、日本列島においては比較的迅速な社会の変化をもたらしたと考えられる。

② モニュメントの空間的集中度　マヤの神殿も日本列島の古墳（神殿）も、モニュメントは中央に独占されず、ゆるやかな階層性をもちながら地方にも相応の規模のものが分布し、中央の構造が徐々に縮小されながら地方で繰り返される構造をもつ点で共通する。モニュメントの造営が、それぞれにコストやパワーを要することから考えると、こうした構造は、中央がコストやパワーを集約しえず、地方政体がそれを保持したまま経済的・政治的・宗教的に自立するという分節的な社会構造を反映しよう（新納 1991）。

その意味で、マヤの神殿も日本列島の古墳（神殿）も、政体群が分立する社会を維持する方向に働き、政治的な「社会統合」の手段や表象物にはならなかった。日本列島において「国家」に向けての政治的な社会統合が進む

プロセスは、神殿が封土墓に交替し、さらにそれが仏教や国家制度を代弁する瓦葺建造物という新たなモニュメントに塗り替えられる過程と併行している。

③ モニュメントの階層的占有度　日本列島では、Ⅱ段階の弥生時代中～後期の埋葬壇およびⅢ段階の神殿において個人とモニュメントとの結びつきが強まったが、王を含む最上位層から「有力農民」といわれる中間層まで大小の神殿が階層的に多数築かれ、その造営のためのコストとパワーは社会的にも各階層に応分に「配分」されて、最上位層が独占しえなかった。日本列島では、モニュメント造営のパワーとコストは、上述のように空間的にも分節的であると同時に、社会的にも分散していたのである。

対してマヤのモニュメントは、Ⅰ～Ⅱ段階前半の先古典期中期・後期には集団性が強かったが、Ⅱ段階後半以降の先古典期終末期・古典期には王との個人的な関係が強まり、その造営パワーが王や王族といった最上位層に独占された点で、日本列島の古墳と大きく異なる。

(3) 総合的評価

以上の検討で、モニュメントと社会の変遷プロセスにおける、マヤと日本列島との共通点と相違点とを抽出できた。

まず、共通点として、紀元前後の約 500 年間に当たるⅡ～Ⅲ段階に、モニュメントは垂直性が強調されるようになるとともに、集団的アイデンティティを喚起する共同性の高いものから、有力者と結びついてその権威や聖性を演出する個人性の強いものへと変化した。両地域で、ほぼ同じように社会の階層化が進んだことの反映であろう。また、モニュメントの造営を独占する顕著な中央政体は成立せず、諸政体が分立するネットワーク社会を形成したことも共通する。

相違点が顕在化するのは、紀元後 4 世紀以降のⅢ段階に入ってからである。モニュメント造営のパワーとコストが、マヤでは王や王族などの最上位層に独占されたのに対し、日本列島では最上位層から中間層までの各階層に応分に配分された。また、マヤでは都市がモニュメントと一体化する形で現れ、それを王や王族が管轄したのに対し、日本列島では都市が成立しなかった。

日本列島の神殿は、王から中間層にいたるエリート個々人相互の関係（出自上のつながり、地位の優劣や対等、主従関係、職能、盟約）を演示するモニュメントであり、このような人格的関係を媒介とした貢納と再分配（トモ・部など）および威信財の交換が、古墳時代の経済の枠組みを作っていた。生産物の多くがこうした人格的関係に吸い上げられて自由なフローを妨げられたことが、日本列島の都市未発達の要因であったと考えられる。このような非都市経済の母体となる人格的関係を演示しつつ富を消費する膨大な神殿群の造営は、都市の形成と背反の関係にあったのである。

紀元後両地域の相違がさらに大きくなるのは、紀元後 7 世紀以降のⅣ段階である。日本列島では、モニュメントが神殿から封土墓を経て瓦葺建造物へと矢継ぎ早に更新される過程で、中国や朝鮮半島を規範とする「国家」として政治的な社会統合を確立した。これは、一次文明の中国王朝を中心とする東アジアの世界観や知識体系に同化するという外的要因による社会変化のプロセスと理解できる。

このようなプロセスは、マヤでは生じなかった。一次文明のマヤ文明では統一王朝という概念やスタンダードは存在しなかった。ウシやウマなどの大型使役動物を欠くという輸送・移動手段の技術的限界、高地の激しい起伏や熱帯雨林低地のジャングルなどが交通の障害となり、トウモロコシなど重くかさばる食料や生活必需品の遠距離交換は非効率的かつ稀であった。その結果、輸送力の制約を越える強力な国家イデオロギーや、発達した官僚組織に支えられた中央集権的な統一王国を形成するには至らないという内的要因もあった。

内的要因としてさらに注意すべき点は、マヤ人は石器を主要利器として不自由なく生活し、多くの人間を動員して手間と暇をかけて基本的に手作業の技術と人力エネルギーで「石器の都市・文字文明」を築き上げ続けたことである。すなわち、技術革新の必要性が低かったことが、持続可能な社会につながったと考えられる。これに対し日本列島は、大陸からの恒常的な文化伝播や刺激によって世界観やそれに根ざした社会構造が頻繁に交替し、社会の持続可能性はマヤよりも低かった。

こうした社会の持続可能性は、モニュメントの世界観にも内在化されていた。古典期の神殿ピラミッドは神聖王の先祖崇拝のモニュメントで、王朝の連続性や世界観を可視化・演出する装置として後世の王の権威の源泉としての社会的機能も担った。マヤの諸王は世代を超えて神殿ピラミッドに先代の王を神格化して埋葬し、より天に近いモニュメントとして神殿更新して王権を強化し、

都市の労働力を統御した結果、神殿ピラミッドが巨大化したといえよう。かたや日本列島の神殿（古墳）は一人一人の王に対して築かれ、葬送儀礼が終われば放置されて、次の王の神殿は別個に築かれた。このようなモニュメントの世代を超えた累積性の有無も、社会の持続可能性の強弱に関係したであろう。

最後に触れておきたいのは、両地域の歴史過程で比較的顕著にみられる「戦争」という事象である。古典期マヤの戦争は主に支配層の間で行われ、弓矢や投槍器よりも石槍（両面調整尖頭器）を手に持って戦う接近戦が主流であった。戦争では政治・経済的な利益を得るために敵の王や高位の王族・貴族を捕虜として捕獲することが重要であり、いかに多くの重要な敵を捕虜にしたかが評価された (Aoyama 2016)。マヤ文字の解読によれば、王がしばしば捕獲・人身供犠にされた。捕虜になった王の権威は失墜したので、戦争の勝敗は王国の盛衰に大きく影響した。古典期マヤの諸王は宗教儀礼を執行する超自然的な能力だけでなく、偉大な戦士としての功績によっても王権を強化した。大王朝が直径 60㎞ほどの領土を直接統治する場合もあったが、ユーラシアのように 1 つの王朝が遠く離れた王朝を征服して奪い尽くし、直接統治することはなかった。

日本列島においても、Ⅱ段階の弥生時代中期～後期からⅢ段階の古墳時代に移る過程で、武器は支配層の手に独占されるようになる（松木 1992）。弓矢と刀剣を持ち鉄製の甲冑に身を固める接近戦が主で、この装備が王や有力者の神殿にそのまま副葬された。しかし甲冑を実際に使用した痕跡はほとんどなく（橋本 2021）、実際の戦争の場面は少なかったと考えられる。Ⅲ段階には朝鮮半島の諸政体（高句麗・新羅・百済・加耶諸勢力）との競合が強まり、そのような対外的緊張を共有して結束したことが、近畿の中央政体を中心とするⅣ期以降の政治的な統合につながったのであり、征服戦争による国土統一が国家の生み出したのではなかった。戦争が社会を政治的に統合するという単純な古典的シナリオは、マヤでも日本列島でも認められないのである。

おわりに

マヤ地域と日本列島は、ともにホモ・サピエンスの集団が 1 万年以上前にユーラシア大陸をあとに移動した先で形成した文化領域であった。本稿では、時間と空間の二つの視点によって両者を比較することにより、その共通性と相違点とを抽出した。垂直性を強調したモニュメントの発展とともに社会が階層化したが、当初は強力な中心が現れずに地方政体が分立するネットワーク社会を形成したことが、もっとも大きな共通性である。その後、「国家」の概念を含む大陸の世界観に同化して新たな社会統合をなした日本列島のようなプロセスは、それ自体が一次文明のマヤでは生じず、世界観やモニュメントや技術体系が同じ形のまま長期間にわたって持続可能な社会が維持された。ヒトの身体と認知の普遍性に根ざす共通性の上に、「出ユーラシア」の方向や距離を含めた環境や社会変化の過程の差が、マヤと日本列島とのその後の相違にみるような文化や歴史の多様な方向性を生み出すようすを、本稿は例示することができた。

＊本稿は、文部科学省科学研究費助成事業・新学術領域研究（研究領域提案型）2019 年度～ 2023 年度「出ユーラシアの統合的人類史学－文明創出メカニズムの解明－」（松本直子代表）の計画研究 A03「集団の複合化と戦争」（松木武彦代表）および公募研究「マヤ文明黎明期の複合社会の形成と戦争に関する研究（青山和夫代表）の成果によるものである。

注

1)　本論では、日本列島の古墳文化を「定型化した大型の墳墓を築く考古学的文化」とし、その存続期間を古墳時代および飛鳥時代とする。

2)「ピラミッド」という呼称は、欧米の考古学者がエジプトのピラミッドになぞらえ付けたものだが、社会的な機能や意味が異なり関連は全くない。マヤ文明のピラミッドは、エジプトとは形態が異なる。頂上部にキャップストーンがなく、尖っていない階段ピラミッドであった。

3)「封土墓」「墳丘墓」の呼び分けと定義は、李盛周による（李 2010）。

4) 奈良県纒向遺跡は、広域な地域間ネットワークの中核的な「都市」であったとされる（寺澤 1998）。都市が生み出されるのは、古墳が消滅する 7 世紀の飛鳥時代後半になってからであり、それも王宮を中心とした政治と儀礼の施設が中心で、自由な経済活動の場としての性格は薄かった。古墳を築いた社会には、マヤのような都市は発生しなかった。古墳も累世的に集まってしばしばコンプレックスを形成するが、そこに集住や交換や手工業工房の址は認められない。

5) 同時期の朝鮮半島各地で発達する墳墓の多くは、埋葬が終わってからその上に礫や土を盛った封土墓であり、頂上に儀礼の場

を設けない点で、日本列島の「古墳」とは性格を異にする。

引用・参考文献

青山和夫 2012『マヤ文明　密林に栄えた石器文化』岩波新書

青山和夫 2013『古代マヤ　石器の都市文明　増補版』京都大学学術出版会

青山和夫 2015『マヤ文明を知る事典』東京堂出版

Aoyama, Kazuo 2016 Warfare, Warriors, and Weapons. In Encyclopedia of the Ancient Maya, edited by Walter R. T. Witschey, pp. 376-379. Rowman & Littlefield, Lanham, MD.

青山和夫 2018「メソアメリカのピラミッド」大城道則・青山和夫・関雄二編『世界のピラミッド大事典』柊風舎，pp.209-452.

青山和夫・坂井正人・鈴木紀・米延仁志　2019「メソアメリカとアンデスの比較文明論」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会，pp.403-433.

Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Flory Pinzón, and Juan Manuel Palomo 2017 Polished Greenstone Celt Caches from Ceibal: The Development of Maya Public Rituals. Antiquity 91:701-717. https://www.cambridge.org/core/journals/antiquity/article/polished-greenstone-celt-caches-from-ceibal-the-development-of-maya-public-rituals/213A2D910DC2C023C1C58A13551A820C

Carlson, John B. 1981 A Geomantic Model for the Interpretation of Mesoamerican Sites: An Essay in Cross-Cultural Comparison. In Mesoamerican Sites and World-Views, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 143-211. Dumbarton Oaks Research Library and Collection Washington, D.C.

Chávez, René E., Andrés Tejero-Andrade, Gerardo Cifuentes, Denisse L. Argote-Espino, and Esteban Hernández-Quintero 2018 Karst Detection Beneath the Pyramid of El Castillo, Chichen Itza, Mexico, by Non-Invasive ERT-3D Methods. Scientific Reports 8, 15391 (2018). https://europepmc.org/article/MED/30337642

Coe, William R. 1990 Excavations in the Great Plaza, North Terrace and North Acropolis of Tikal. Tikal Report No. 14. The University Museum　University of Pennsylvania, Philadelphia.

福永伸哉 2020「古代日本の古墳築造と社会関係」国立歴史民俗学博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編『日本の古墳はなぜ巨大なのか：古代モニュメントの比較考古学』吉川弘文館，pp.234-253.

橋本達也 2020『巨大古墳の時代を解く鍵 黒姫山古墳』（シリーズ「遺跡を学ぶ」147）新泉社

Feinman, Gary M., and Joyce Marcus 1998 Archaic States. School of American Research Press, Santa Fe.

Inomata, Takeshi 2006 Plazas, Performers, and Spectators. Current Anthropology 47:805-842.

Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Jessica Munson, Flory Pinzón, and HitoshiYonenobu 2015 Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Co-existing Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. Proceedings of the National Academy of Sciences 112:4268-4273. https://www.pnas.org/content/pnas/early/2015/03/18/1501212112.full.pdf

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Víctor Castillo, and Hitoshi Yonenobu 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. Science 340:467-471.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Flory Pinzón, and Kazuo Aoyama 2019 Artificial Plateau Construction during the Preclassic Period at the Maya Site of Ceibal, Guatemala. PLoS ONE 14(8):e0221943https://journals.plos.org/plosone/article/file?id=10.1371/journal.pone.0221943&type=printable

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Verónica A. Vázquez López, Juan Carlos Fernandez-Diaz, Takayuki Omori, María Belén Méndez Bauer, Melina García Hernández, Timothy Beach, Clarissa Cagnato, Kazuo Aoyama, and Hiroo Nasu 2020 Monumental architecture at Aguada Fénix and the rise of Maya civilization. Nature 582:530-533. https://repository.arizona.edu/handle/10150/641786

Joyce, Rosemary A. 2004　Unintended Consequences? Monumentality as a Novel Experience in Formative Mesoamerica. Journal of Archaeological Method and Theory 11:5-29. http://townsendgroups.berkeley.edu/sites/default/files/joyce_2004_unintended_consequences_monumentality.pdf

李盛周 2005『新羅・伽耶社会の起源と成長』（木村光一・原久仁子訳）雄山閣

Martin, Simon, and Nikolai Grube 2008 Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya. Second Edition. Thames & Hudson, London.

松木武彦 1992「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価－軍事組織の生成に関する一試考－」『考古学研究』39-1:58-84

松木武彦 1996「日本列島の国家形成」植木武編『国家の形成―人類学・考古学からのアプローチ』三一書房

松木武彦 2009『進化考古学の大冒険』新潮社

松木武彦 2019a「弥生時代から古墳時代へ―「東アジア墳墓文化」の提唱―」国立歴史民俗学博物館・藤尾慎一郎編『再考!縄文と弥生―日本先史文化の再構築―』吉川弘文館，pp.193-206.

松木武彦 2019b『考古学から学ぶ　古墳入門』講談社

松木武彦 2020a「はじめに―古代モニュメントの比較考古学―」国立歴史民族学博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編『日本の古墳はなぜ巨大なのか：古代モニュメントの比較考古学』吉川弘文館，pp.1-3.

松木武彦 2020 b「おわりに：世界の中の日本の古墳」国立歴史民俗学博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編前掲書，pp.254-262.

松本直子 2020「人間行動とモニュメント」国立歴史民俗学博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編前掲書，pp.215-233

Milbrath, Susan, and Carlos Peraza Lope 2003 Revisiting Mayapan: Mexico's Last Maya Capital. Ancient Mesoamerica 14:1-46. https://www.researchgate.net/publication/231942957_Revisiting_Mayapan_Mexico's_last_Maya_capital

Miller, Mary and Karl Taube 1993 An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya. Thames and Hudson, London.

新納　泉 1991「6、7 世紀の変革と地域社会の動向」『考古学研究』38-2:55-67

Palomo, Juan Manuel 2020 Local Community and Foreign Groups: Political Changes in the Ancient Maya Center of Ceibal, Guatemala. Ph.D. Dissertation, University of Arizona, Tucson. https://repository.arizona.edu/handle/10150/648645?show=full

Saturno, William A., David Stuart, and Boris Beltrán 2006 Early Maya Writing at San Bartolo, Guatemala. Science 311:1281-1283. https://www.science.org/doi/10.1126/science.1121745

関 雄二 2006『古代アンデス権力の考古学』京都大学学術出版会

関　雄二（編）2015『古代文明アンデスと西アジア：神殿と権力の生成』朝日選書

関 雄二 2017『アンデス文明――神殿から読み取る権力の世界』臨川書店

Stanley Guenter 2007 The Tomb of K'inich Janaab Pakal: The Temple of the Inscriptions at Palenque. Mesoweb: www.mesoweb.com/articles/guenter/TI.pdf

Stuart, David 1997 The Hills are Alive: Sacred Mountains in the Maya Cosmos. Symbols (Spring 1997 Issue):13-17.

Stuart, David, and George Stuart 2008 Palenque: Eternal City of the Maya. Thames and Hudson, London.

Suyuc Ley, Edgar, and Richard D. Hansen 2013 El Complejo Piramidal La Danta: Ejemplo del Auge en El Mirador. In Millenary Maya Societies: Past Crises and Resilience, edited by M.-Charlotte Arnauld and Alain Breton, pp. 217-234. Electronic document, published online at Mesoweb.

田中清美編 2015『加美遺跡発掘調査報告書－大阪市中小規模工場団地造成に伴う発掘調査報告書 前編』公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所　http://doi.org/10.24484/sitereports.17329

Taube, Karl 2000 Lightning Celts and Corn Fetishes: The Formative Olmec and the Development of Maize Symbolism in Mesoamerica and the American Southwest. In Olmec Art and Archaeology in Mesoamerica, edited by John Clark and Mary E. Pye, pp. 297-337. National Gallery of Art, Washington, D.C.

寺澤薫　1998「集落から都市へ」都出比呂志編『古代国家はこうして生まれた』角川書店，pp.103-162.

寺澤薫 2000『王権誕生』<日本の歴史 02> 講談社

都出比呂志 2000『王陵の考古学』岩波書店

和田晴吾 2019「前方後円墳とは何か」吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『前方後円墳：巨大古墳はなぜ造られたか』岩波書店，pp.21-71.

安田喜憲 2009『稲作漁撈文明 : 長江文明から弥生文化へ』雄山閣

吉井秀夫 2012「朝鮮半島諸国と古墳文化」（一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 7　内外の交流と時代の潮流』同成社）

吉留秀敏編 1994『那珂 11―二重環濠集落の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 366 集、福岡市教育委員会　http://doi.org/10.24484/sitereports.17660

若狭徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館

山口佳紀・神野志隆光校注・訳 1997『古事記』<新編日本古典文学全集 1> 小学館

（Received September 15, 2021; accepted December 21,2021）